

# この人に聞く～今語られる当時の姿～

## 自分が経験した事実を後世に伝えたい



池崎町  
長峰 和人さん  
Nagamine Kazuhito (79歳)

当時は高校1年で、予科練生たちとちょうど同じような年代だったので、いろいろな話を直接聞いた。その中でも印象深いのは、予科練生たちが温井から伊久留の方へ朝歩いて行くときに、スコップを肩に担ぎ、愛国行進曲を歌いながら「これでは予科練ではなく、ドカ連(土方連中)だ」と自分たちで話していたこと。国のために自ら志願して飛行士に応募した彼らが、毎日操縦かんの代わりにスコップを握らされた気持ちを思うと、かわいそうに思う。

日曜日は建設作業が休みだったので予科練生たちはいつもその日を楽しみにしていて、一緒に釣りに行ったこともある。それでも、自分と同じ年の予科練生が毎日腹を減らして何でもいいから食べ物をわけてほしいと度々家に来るのを見ると、何とも切ない思いがした。

もしも戦争があと半年続いていたら、相馬・高階ともに焼土となっていたことだろう。これらの事実を後世に伝えなければならぬ。

## 尊い犠牲のうえに今がある



伊久留町  
作井 吉雄さん  
Sakui Yoshio (82歳)  
伊久留区誌編集委員長

かつて伊久留は旧相馬村で中心部だったが、月日が経ち、このままでは消えてしまう、伊久留にも何か誇りを持てるものが必ずあるはずだと思ったのが、伊久留区誌を作るきっかけだった。始めは相馬飛行場があったことを後世に残すためにやっていたが、どうせやるなら伊久留の歴史をできるだけ収めようという話になった。

飛行場ができたことはどうしようもないことだったが、建設当時も大きな反対の声はなく、また田んぼへ復旧するときにも区民総出で行われるなど、その歴史を調べていくうちに、住民同士がとても仲が良く、協力的な地域であることを改めて気付かされた。

食糧不足の戦時中であっても、予科練生たちのために貴重な芋や豆をそっと渡すような温かい心を持った人が多かった。当時命を捨てる覚悟だった予科練生たちが、終戦後にお礼に来たのは、その気持ちが通じていた証拠。

いずれにしても、尊い犠牲のうえに今があるということをお皆さんに知ってもらいたい。

## 大切なのは戦争をしないことそれだけわかればいい



吉田町  
長尾 勇さん  
Nagao Sanmu (84歳)  
元田鶴浜町文化財保護審議会  
会長

軍隊へ入隊後、当時の満州国へ渡り、国民学校の教師をしていた。戦後は日本で教師になろうとしたが、適格審査があり、外地(本土以外の日本領土)にいたという理由で就職できなかった。

当時、吉田には朝鮮人労働者が寝泊まりしていたので付き合いがあった。生活していくために、戦後の混乱した闇市場で朝鮮人と一緒にいろいろな商売をした。相馬飛行場へも商売に行ったことがある。

空襲を受けた後の福井へ死体の処理に何日か行ったが、とても悲惨な状況だった。福井も富山もやられたので、次は石川だと思っていた。終戦がもう少し長引いていたら命はなかったと思う。それを思うと運命を感じる。だからこそ、今を生きることの大切さやすばらしさが身にしみる。

去年から田鶴浜小学校で相馬飛行場の話をしている。子どもたちは今はわからないかもしれないが、大人になってきくとわかる時が来る。そのためにやっている。大切なのは戦争をしないこと。それだけわかってくれればいい。



昨年の様子(相馬飛行場跡の石碑前にて)

内容は田鶴浜地区の地名の由来など生徒たちに関心を持ってもらえるような内容となっている。相馬飛行場の話もその中の一つに含まれており、生徒たちは自分たちが住む地域のことに関心深く耳を傾けていた。

## 子どもたちへ「伝える」活動

田鶴浜小学校  
「ふるさと歴史教室」

田鶴浜小学校では、自分たちの地域を愛する気持ちを育てようと、昨年度から「田鶴浜地方史の会(会長・上島進さん)」の協力のもと「ふるさと歴史教室」に取り組んでいる。毎年6年生の生徒が10回にわたり、地元の人から話を聞いたたり、現地見学を行ったりしながら、郷土の文化や人々の暮らしを学んでいる。

今では考えられないことだが、当時は戦争に勝つことがすべて。国を守るためには戦争も仕方のないことと考えられていたのかもしれない。しかし、そこには大きな犠牲があったことを決して忘れてはならない。

先祖から代々受け継がれ、ようやく田植えが終わった田が、何の補償されるあてもないままに容赦なく埋め立てられた。その心中はいかかなものだったであろうか。さらに、青春時代を土工事で過ごした予科練生や兵士たちの時間。そして何より戦争で命を落とした人やその遺族。ケガを負った人など……。

幸いにもこの飛行場は利用されることなく終戦となり、戦禍は免れたものの、もし戦争があと数カ月、いや数日間続いていたら、相馬飛行場は爆撃を受け、周辺一帯は焼け野原と化していたかもしれない。そして今を生きる私たちの命もなかったかもしれない……。

短期間のうちに飛行場が建設され、

相馬飛行場があった事実を忘れないようにと、毎年相馬公民館では紙飛行機大会が行われている

(平成20年11月2日撮影)

そして跡形もなく消え去った。戦争の記録と記憶も月日の経過とともにだんだんと薄らぎていく。今では当時のことを知る人も少なくなり、その苦勞や思いが忘れ去られようとしている。しかし、この事実を単に「幻の飛行場」として何の跡形もなく終わらせてもよいのだろうか。

大きな教訓となった戦争のための数々の体験を決して風化させることなく正しく後世に伝えることが大切だといふことで、平成15年に伊久留地区の住民が中心となり「伊久留区誌」が製作された。そして、その思いを将来に向けて形として残すために、「記念碑」が建てられた。

これまで学校の授業やテレビ報道などを通じて戦争というものの悲惨さや平和の大切さを考える機会はたくさんあった。しかし、それは過去の話であり、今を生きる私たちにとってどこか他人事のように思っただけではなかったのだろうか。

身近な地域に紛れもなくあった「相馬飛行場」。その事実を知ったとき、自分たちが今ここに生きていることのありがたさを感じずにはいられなかった。戦争経験者は口をそろえて言う。「戦争だけは二度としてはならない」。

今ある平和は決して私たちだけのものではない。私たちの命は私たちだけのものではなく、過去の尊い犠牲のうえにあることを決して忘れてはならない。そして、未来を生きる子どもたちへそれを伝えることが、今を生きる私たちの責任ではないだろうか。

8月15日、終戦の日。

過去の多くの犠牲者に対し、哀悼の意をささげるとともに、私たち一人ひとりが未来への平和を誓わなければならぬ。

特集「平和への誓い」 完

(資料)伊久留区誌、能登の文化財など